

第二章

神の現実と祈りの四根本行為

心の統一と神の現実

話題になっていた、心の統一という空間の中で、生ける神の現実が立ち現れてきます。この現実の前へ到達すること、これが祈りの第一の課題であるとともに、最も骨の折れることでもあります——第二の課題は神の聖なる臨在、プレゼンスをしつかりと保持し続けて、神の臨在が課している諸要請を充たしていくことであります。

わたしたちは「骨の折れること」という言葉を用いました。それも、よく考えた上です。それは、祈りとは実際そのようなものでありうるからです。時としては、祈りは楽々とできることがあります。言葉が生きてでもいるかのように心から迸り出てくることがあります。けれども、一生を全体として、それも大多数の人々について見るなら、そのようなことは例外にすぎません。殆どの場合、祈りははつきりと意図して実践しなければならぬのです。そして、この実践にあたっての骨折りのかなりの部分は、神の現実を実際に感知することができないということに由来しています。このような場合には、祈っている当人に見れば、空虚の中に立っているような気持ちにもなるかもしれませんし、他の一切のことのほうが差し迫っているように見えてもきます。なぜなら、これらのことははつきりと実感できる仕方では現にそこにあるのですから。ですから、全ては頑張り抜くかどうかに掛かってくることになります。祈りは自分に何も与えてくれないと言う人、祈るようにと自分の内奥が迫ってくることもないと言う人、あるいは、祈りが真正のものではなくなるので、自分はむしろ祈りはしないことにするとと言う人、このような人は

この奉仕、勤めを放棄し、祈るということにおいて問題となっている中心的なものを失うことになりません。なぜなら、「この授業」時限の空虚さの中で頑張り抜くことは、別の時になされる極めて独創的な祈りをもって置き換えることができない或る特別な意味を持っているからです。即ち、そのような祈りは、厳密な意味での信仰を真剣に受け止めていることを意味しています。それは、全面的に神の言葉に対する忠実という理由の故にのみ祈りを実行することであり、暗闇の中に向けて話をするのであり、耳を傾けておられるあの方に向けて、自分ではあの方のことが何も分かっていないのに話をするのであるからです。

空虚ということにも様々な形があります。まずは、単純に欠落を、現実にも何もないという事実を意味しているものがあります——けれども、現にその場に存在するということの特別な種類を形成しているものもあるのです。この二つの形を区別することは簡単ではありません。時には、神が本当に実在しないかのような、したがって、祈りのみか信仰すらもお終いにすることこそが理性的と思われるようなこともあります。けれども実際は、そこで起こっていることは信仰の試練です。なぜなら、「ミサの中の感謝の」賛歌「聖なるかな」が言っているように、「天地はあの方の栄光に満ちている」のですから。そうです、信仰者に約束されていることは、信仰者にとって神は石や樹木にとつてと同じ在り方で存在されるのみではなく、特別な仕方、即ち「その人のところに」、それもあの方がその信仰者を愛しておられるが故に「その人のところに」おられるという在り方で存在しておられるということでもあります。けれども、この地上は覆い隠すことを

特技とする場所です。そして、神の前に懸けることのできる最も目の細かいベールの一つが、神の近さを全く実感することがないということなのです。

ところで、この空虚さの中でも、何か独特なものが自己の存在を密かに告げているということがあるかもしれません。そのものとは、意味のある何かでありながら、どのようにしても全く表現することのできないものであり、一見、無としか見えていないものの中心において、あらゆる不可能性に抗って自己を主張しつづけている一つの意味であります。こういったことは一般に考えられているよりも頻繁に起こっています。そして、人はそこで起こっていることにもっとよく注意する筈なのです。この密やかな息遣い、この「掴むことはさせない繊細なる意味ポイント」が一番微かな仕方での神の自己証言を形成しているものです。一見ひとつの無としか見えていませんが、信仰を担ってくれる能力があり、それ故にその人が頑張り抜くことができるようにもしている意味ポイントなのです。

その信仰者が頑張り抜くなら、あの空虚はいつかは満たされることになります。確かに神は単に思想、想像、感情といったものにすぎないだけの存在ではなく、現実です。しかも、あの方は単にわたしたちの遙か上方で、一切の関わりからは解き放たれた至福なる無関心のうちに悠然と時を過ごしておられるのではなく、わたしたちを愛しておられます。しかも、あの方は主であり、自由な方、権能ある方でもあります。ですから、あの方にとってはいかなる柵も存在しません。わたしたちの心の冷たさという柵すら存在しないのです。そして、忠実に頑張り抜いている

人に対しては、己で自身について証言をなさいます。神がひとつの思想、ないしはひとつの感情にすぎないのなら、その時は、多彩極まりない事物や、活力溢れる人間たちのほうが、甘味であつて実在感を備えてもいるこの地上のほうがよいでしょう。けれども、あの方は、「ほら、わたしはドアの前に立ってノックしています。わたしの声を聞き分けてドアを開ける人、その人のところにはわたしが入つていこうと思つています……」(黙二・三〇)と言われたあの生ける神なのです。

神のこの現実、密やかな息遣いから、人間を全く溺れさせてしまふ程の権能にまで及ぶ様々な強烈さで証言されうるものです。わたしたちが神の現実を迎え入れるのは、わたしたちの本質の最も本来的なものをもつてであります。すなわち、魂の奥底をもつて、霊の高みをもつて、内奥の生命の最も輝けるところをもつてであります。^(原注)神の現実はまだ一つしかなく、単純であります。すが、それにも拘らず、ありとあらゆる特性の充満でもあります。ですからこそ、宗教生活の巨匠たちは霊的感覚という言い方もするのです。すなわち、内的な眼、耳、触覚、味覚といった言い方をしていますが、これらの言い方で彼らが念頭に置いているのは、神の現実を経験できる様々な道、方途なのであります。

そうは言つても、祈りはやはりこの種の経験からは独立していなければなりません。神が自身を実感させてくださる時には、祈り手はこの充満の中に立つことを許されることになります。そのような場合には、その人はその経験を感謝し、この経験を本当に大切にするようにしたらよ

いでしょう。けれども、空虚の中へと入って来た時には、信仰のみをもって自分を支え、頑張り抜かねばなりません。そして、黙示録の中のあの七通の回状の末尾にある約束を読み返すのもよいかもしれません。あれらの回状はすべて、地上の現存在の暗黒と閉塞状況の中にありながら、勝利を話題にしています（二章と三章）。いまこそ、あそこでの約束を肝に銘じるべき時なのです。

神、あの聖なる方

啓示は神について多くのことを述べています。^(原注10)ところで、啓示の言明には、残余の全ての言明を規定しているもの、即ち、あの方は聖なる方であるという言明が含まれています。

この聖性は何なのかを言い尽くすことは誰にもできません。それは、この聖性を感知することが極めて難しいからでも、幾つかの極めて錯綜した問題を伴っているからでもなく、この聖性がひとつの原所与——厳密に解するなら、そもそも原所与そのもの——であるからです。この聖性は神の根本刻印であり、神の本質を規定している第一のものであります。預言者にあつては、『あなたがたは誰とわたしを比較しようとしているのか、わたしは誰と等しいということになるのか?』あの聖なる方はこう詰問しておられる」と言われています（イザ四〇・二五）。この言葉をもって、聖性が神の最も固有な本質であることが定立されているとともに、創造された一切のものからは区別されてもいるのです。ですから、この聖性が何であるかを言い尽くすことはで

まず、できることは、見なさい、聴きなさい、心で実感しなさいと言いつつ、この聖性のほうを指し示すことだけでしかないのです。光とは何なのかを、概念を用いて述べることも、やはりできないではありません。もちろん、光がどのような振る舞いをするか、どのような法則が光を規定しているか、光がどのような作用を持っているか、光がなくなるとどういうことが起きるか、こういったことを言うことは確かにできません——けれども、光自体が何なのかを言うことはできません。この点では、「自分の両眼を開けて、よく見なさい」と言うことしかできないのです。

神の聖性とは、神の本質に固着しているあの第一のものであり、そのものを備えておられないなら、あの方があの方ご自身でなくなってしまうことになる、そのものなのです。すなわち、わたしたちが普通に経験することのできる一切のものとは別のものであり、あの方を認識するための手掛かりとなる、あの方の本質そのものの色調なのです。描写し名差すことのできる様々な特性を或る人が持っているとして、それらの特性の中に、ないしは背後に、他の一切の特性の中で自己を表現している最終的な特性が横たわっているにも似ています。ここで言われるこの最終的の特性とは、その人の本質に固着しているものであって、その人を愛している人間なら肌で感じ取っているもの、そしてその人を見分ける手掛かりにしてもいるものです——神の聖性とはまさにこのようなもので、神に最も固有なものなのです。

人間や事物、出来事はみなこの世界のもの、地上のもの、此岸のものであり、現にそこに、露呈され、確認もできる仕方で存在しています。それに対して、神はこの世界のものでも、地上のものでもなく、隔てられ、留保され、秘密が固着している仕方で存在しておられます。このよう

な言い方ができるとはしても、これらの言葉は必ず単にひとつのヒント、輪郭のスケッチ、境目の描写でしかなく、本来のポイントをついたものではありません。本来のポイントは経験が覚るしかないものです。宗教的な事物は、ここで言うポイントについての或る微かな勘とでもいったものを与えることはできるかもしれませんが。たとえば、実用性もあり、堂々としていて、美しいというだけでなく、敬虔さを備えてもいる教会（堂）などがそうです。このような教会の中では、人はあの別のものを、すなわち、自ずと人がこの世界のことは全て外に置いたままで、静かになつて跪かざるをえないようにしてしまうあのものを、実感するのです。近づいて来る人に向かって、「あなたの靴を両方とも脱ぎなさい。あなたが立っているそこは聖なる土地なのです」と、炎を上げている刺灌木の茂みの中から天使が叫ぶ、聖書のあの箇所はこのことを力強く表現しています（出三・五）。この別のものに属している何かが備わった本質を持っている人々も存在しています。このような人々は、皆が無造作に生きている場となっている日常的な確実性に揺さぶりをかけ、物事の重みを変更し、最終的には、唯一それだけが決定的であるものについてのあの微かなる勘を呼び覚まします。彼らのしていることは、神の聖性についての暗示です。あの方にしかないあの刻印についての、わたしたちにとっての「一」にして「一」切、すなわち、わたしたちの救済そのものが掛かっているあの代替することのできない「貴重なるもの」についてのいくつかの暗示なのであります。

聖性とは、神が清らかであるということを意味しています。そして、この清らかさは一切の権力を備えているとともに、焼き尽くすものでもあり、一吹き染みすらも許容しない清らかさで

もあります。この清らかさは、あの方が善い方であること、それも、あの方が善の要請を充たしているという意味においてのみでなく、ご自身が「善」そのものであるという意味においても善い方であることを意味しています。そして、この意味においては「神以外には誰も善い者はいない」(マタ一〇・一八)のです。わたしたちが「善い」という言葉で呼んでいるものなど、いわば、あの方の現存在の無限の充満と単純さから千切れ落ちた一片を形成しているにすぎません。神こそが一切を計るための尺度であり、万物がそれぞれ自らの真価を試されるための検査であり、何であろうと、ありとあらゆるもの一切が掛けられることになる、本質に固着したあの審判なのです。

人間は神の近くに来るや否や、直ちにこの聖性と遭遇して、何らかの仕方での聖性を覚り、様々な仕方での聖性に対して答えることになります。

その人は、自分自身が聖Ⅱではなく、この世界のもの、この地上のもの、否、もっと酷いものであって、汚れていて罪責に染まっていることを覚ることになります。その人は、自分が神に属してはいないことに気付き、自分自身を神の近くから取り去ろうとする衝動を実感することになります——あるいはペトロと同じように、「主よ、わたしから離れてください、わたしは罪深い人間ですから」(ルカ五・八)という言葉を発したい気持ちになります。けれども、その人は同時に、自分がこの聖なる神を必要としてもいる、それも、いかなる状況のもとでも、しかも生死に関わる仕方が必要としていることを実感しています。自分がただあの方にもとづいてしか生

きることができず、最終的にはあの方のもと以外のどこにもいることができないことを実感しています。このようにして、その人自身は聖性とはおよそ掛け離れた存在であるにも拘らず、その人は神のほうへと駆り立てられてもいきます。そして、その人は詩篇と同じように、「主よ、わたしの神よ、あなたこそがわたしが求め探しているお方です。わたしの魂はあなたを渇き求めています。乾燥しきった土地が水を喘ぎ求めるように、わたしの体はあなたを喘ぎ求めています」（詩六二「六三」・一一三）という言葉を発するのです。

心のこの二つの動きの双方の中から、祈りのいくつかの形が成立してきます。否、祈りはどれもみな、この二つの動きに基礎を置いているのです。それは、祈りとは最終的には、神の聖性に対する人間の答えであるからです。全知、全義、全能、全現実でしかない神などは何か怪物のようなもの、まさに無条件の絶対存在でありましょう。人はそのような方を驚嘆すること、承認すること、そのような方を怖れること、そのような方には押しつぶされてしまうと感じること、その他様々なことができるかもしれませんが、そのような方に向かって祈るということはできないであります。祈るとはあの方の聖性に向かうとき初めて可能となることなのです。神の全知、正義、現実、権能、その他あの方の存在本質に何が属しているにしても、それらはすべてこの聖性によって初めて、あの刻印を、あの生ける秘密、あの遠くて近い秘密を、即ち、祈りというものが可能となるためのあの最も内的な接触権を手に入れるのです。神の特性として見るなら聖性と名付けねばならないような類いのものを人間の行為に置き換えるなら、それが祈りなのだ、とすら言いたくなるくらいです。

神の聖性に対する答えにはもうひとつ第三のものがありますが、これは酷いものです。この答えは、人間の本質の、矛盾に満ちた邪悪な根源に由来するもので、人間が神の聖性の前に出るとう気分が悪くなり、神の聖性によって苛々させられ、神の聖性に対して反抗することになるということにあります。何と秘密に満ちた発現であることでしょう！ 神とはまさに意味と権能の総括であり、人間とはあの方によって思惟され創造されたものであり、「あの方の中で生きてもいい、動いてもいい、存在してもいい」(使一七・一八)ものであるのなら、このような発現がいかにして可能なのか、と問うことができるのではないでしょう。実際、この発現は理解できないものでもあります。というのは、この発現においては「邪悪の密儀」がその姿を現しているのですから。罪とは最終的には神の聖性に対する反逆以外の何物でもありません。そして、わたしたちは、この反逆について、それが単に反乱を起こしている人々、神を否定している人々の事柄でしかないかのような話し方はしないように気を付けたいと思います。というのは、強い、弱いといった違いはあるとしても、また、公然たる形であるか、あるいは、自足的な文化や真正の生活健全な自然らしさの様々な要請の背後に隠された形であるかは別にして、可能性としてはこの反逆はどの人間の中にも存在しているのですから。この反逆が支配者の地位に就くときは、祈りは死ぬことになります。ですから、わたしたちは目覚めていて、この反逆が蠢き出すや否や、直ちに抵抗しなければなりません。そして、この反逆を真実をもって溶解してしまうとか、落ち着いてバランスをとる、或いは断固として超克するとか、その他、この反逆を始末するために最も適したやり方で対処するようにしなければなりません。

しかし、この点に關してはやはり以上で十分かもしれませんので、最初に話題になっていた、祈りの二つの根本的な動きに戻ることにしましょう。

罪責の認識と悔悛

神の聖性の前においては自分自身が無価値であることを人間が覺るとき、最初の根本的動きが成立してきます。自分が利己的で、義しくなく、汚れていて、邪惡であることが見えてきます。自分の不正を実感し、査定します。すなわち、今日の、昨日の、かつての或る日のいくつかの行動を、それだけでなく更に、自分がいま現に嵌まり込んでいる状態全体を、生來の、さらには後天的に育まれてきた自分の現存在を、そして、啓示が理解している意味での、そしてこの自分の中でその本質を展開してもいる姿での「罪」を実感し、査定します。罪とは、生ける神に抗って歩むことであるだけではないことを、つまり、単に不道德なことであるのみでなく、聖でないということを意味していることを、その人は認識します。その人はそのことを見、その通りであると同意もします。そして、「なぜなら、わたしの罪責はわたしには分かりすぎるくらいよく分かっていますから、そしてわたしの罪は常にわたしの前にあるのですから。わたしが罪を犯したのは、ひとえにあなたに抗ってのみしたことでした、あなたが嘉されないことをわたしはしたのです。」「これをわたしは賛美の気持ちを含めて公言しますが、それは」あなたが発せられた言葉が正しさを保ちつづけるためです……」（詩五〇「五一」・五一六）と言っている詩篇第五〇番と同じ